

第19号掲載論文における修正について

『東アジア研究』編集委員会

本誌第19号（2021年3月1日発行）に掲載された論文「技能実習生に向けられた日本語母語話者の文末表現の特徴——鉄骨工場における作業現場のデータと講習用教材との比較から——」（張学盼，pp.47-66）において，引用及び説明が不十分である箇所がありました。ここに修正対応表を掲載するとともに，関係者にお詫び申し上げます。

	修正前	修正後
p.48, 左列, 上から 8行目	しかし、技能実習生と日本語母語話者のコミュニケーションに関する研究は十分に成されているとは言えない（飯田2020：32）。日本語母語話者が考える技能実習生にとっての日本語の「わかりやすさ」と、技能実習生にとっての日本語の「わかりやすさ」には、すれ違いや差異が存在する可能性がある（飯田2020：34）し、（技能実習生向けの）講習で教えられている日本語と作業現場で使われている日本語とは相違していることも指摘されている（赤塚2008：151、153、佟・浅野2001：194、198）。	しかし、 技能実習生向けの日本語教育に関する研究はまだ十分ではないことが現状である。飯田（2020：34）によると、「日本語母語話者が考える技能実習生にとっての日本語の『わかりやすさ』と、技能実習生にとっての日本語の『わかりやすさ』には、すれ違いや差異がある可能性がある」とある。また、（技能実習生向けの）講習で教えられている日本語と作業現場で使われている日本語とは相違していることも指摘されている（赤塚2008：151、153、佟・浅野2001：194、198）。
p.52, 右列, 下から 1行目 ～ p.53, 左列, 上から 1行目	スタイルというと、もちろん、主文末のスタイルを取り扱うのは一般的だが、本稿では、それに加えて（復文の）主節が省略された場合も、従属節のスタイルを取り扱う対象になる。 3）「〇形」項目については、動詞等（名詞、動詞、イ形容詞、ナ形容詞）の〇形であるかどうかにより、「動詞等の非〇形」と「動詞等の〇形」2分類に分ける。	スタイルというと、もちろん、主文末のスタイルを取り扱うのは一般的だが、本稿では、それに加えて（復文の）主節が省略された場合も、従属節のスタイルを取り扱う対象になる。 また、作業現場における日本語と講習における日本語を比較した研究として、飯田（2020）が挙げられる。飯田（2020）では、動詞を中心に、辞書形や「ます形」といった活用形から論じられている。一方、本稿のスタイル項目では、動詞、名詞、形容詞など、述語になれるものすべてを含め、それらの文末表現のスタイル／文体に注目している。この点で、飯田（2020）とは異なっている。 ここで、飯田（2020：32-33）における例文を借りて、具体的に説明する。 ①「涼しくて寝るのにちょうど良いね」って言ったっけ、「寝る？寝るわからない」って言って。携帯でこれ中国語で寝るっての見せたっけ、「ああー、寝ます

		<p>ですね」って。ははは。(p.32)</p> <p>②これこれ：：あの：<u>疲れる意味分かる？</u> (p.33)</p> <p>③BA, <u>ぶた死ぬない？</u> (p.33) (下線は本稿筆者が加えたもの)</p> <p>飯田 (2020) の注目点は動詞の活用形 (辞書形か「ます形」かという問題) にあり、①②③の例から、「寝る」「疲れる」「分かる」「死ぬ」といった辞書形が4つ現れたと数える。一方、本稿の注目点は文末 (普通体か丁寧体かという問題) にあるため、①②③の例では、「よい」「分かる」「ない」といった普通体が3つ現れたと数えることになる。飯田 (2020) では、動詞の辞書形が作業現場でどのぐらいの使用率があるかという問題や、動詞の「ます」形が講習用教材ではどのぐらいの使用率があるかという問題を扱っているが、本稿ではこれらの問題については射程外とする。</p> <p>3) 「〇形」項目については、動詞等 (名詞、動詞、イ形容詞、ナ形容詞) の〇形であるかどうかにより、「動詞等の非〇形」と「動詞等の〇形」2分類に分ける。</p>
<p>p.61, 右列, 上から 5行目</p>	<p>要するに、講習で、丁寧体を基調として教えられているため、それになれた技能実習生が普通体を基調とする作業現場の発話に接触する際、意思疎通がうまくいかなかったり、誤解を生じたりすることがありうると考えられる。</p>	<p>要するに、講習で、丁寧体を基調として教えられているため、それになれた技能実習生が普通体を基調とする作業現場の発話に接触する際、意思疎通がうまくいかなかったり、誤解を生じたりすることがありうると考えられる。講習で教わっている日本語と作業現場で使われている日本語の差異が、技能実習生と日本語母語話者のコミュニケーションに影響を与えうる点については、飯田 (2020) の指摘と一致している。</p>

以上